

## 横山ゆずり作 「敵対心② ライバル」

- 効果音 (終業のチャイム)
- 先生 はい、終わりだ。名前を確認して後ろから集めてこい。
- 効果音 (生徒ガヤ)
- 安田 おい、山崎、どうだった？ できたか？
- 山崎 いや、さっぱりだ。最悪だよ。お前、調子よかったみたいだな。
- 安田 いやあ、おれはもう始めっからあきらめてんのさ。
- ナレーション ここは、都内でも指折りの受験校で、2年の時から毎月、校内模試を行い、成績上位者の名前をはり出すことになっていました。
- 男子A おーい、この前の模試の順位、発表になったぞ！
- 一同 (口々に)「エー！」「速いな」「おれ、関係ねえや」etc.
- 山崎(モノローグ) (自分の名を探しながら)あれはできなかったからなあ。下がってるだろうな。えっと、あ、会った、38番… 38か…。(ため息)安田のやつは…安田、安田、と。あ、A組 安田一男17番。あいつ、「全然できなかった」なんて言ってたくせに。アツ安田…。
- 安田 オス、山崎。あつたか？…38か。派手に下がったな。でも、まあ、気にすんなよ。来月もあることだし。何、お前ならすぐに挽回できるさ。
- 山崎 (さえぎるように)ほっとしてくれよ！ お前には関係ないだろ！
- ナレーション 今の山崎君にとっては、安田君の励ましのつもりの言葉も、ただの気休め、いえ、それどころか、皮肉のようにさえ聞こえたのでした。
- 山崎君と安田君は幼い時からの友達で、今も同じ大学を目指して頑張っているのですが…。
- 山崎(モノローグ) 安田…。小さいころから何をやるにもあいつと比べられてきた。同じ高校に入って、そして今度は大学受験。あいつにだけは負けたくない。あいつにだけは！
- ナレーション そんなことがあった数日後に――。
- 先生 あ、山崎、授業が終わったらわたしのところに来なさい。
- 音楽 (ブリッジ)
- 効果音 (職員室のドアの開く音)
- 山崎 あの…。
- 先生 ああ、来たか。まあ掛けなさい。どうだね、最近調子は？この間の模試もそうだが、学内の成績も少し伸び悩んでいるようだが？ まあ、こういう時期はだれにでもあるから、あまり気にせずにマイペースでやるといい。ただ、君の第1志望だと、学年で20番にいないと難しいからねえ。
- ナレーション その時の山崎君の心には、「第1志望は危ない」という先生の言葉よりも、“安田君に負ける”という不安が大きく広がっていきました。
- 山崎(モノローグ) (エコー)安田に、安田に負ける…。
- ナレーション それからというもの、幼なじみで、以前は以前は仲のよかった安田君に対する山崎君の気持ちは、知らず知らずのうちに、単なる競争心から敵対心へと変わっていったのでした。周囲の友達ともあまり話さなくなり、いつしか“ガリ勉”として敬遠されるようになってしまいました。

た。そんなある日、月例の校内模試が終わった時に――。

男子A (ひそひそ)おい、おれ、見ちゃったよ。山崎のやつよ、前の席の松田の答案を後ろからのぞき込むようにして…。

男子B カニングか？ あのガリ勉が？

ナレーション カニング。山崎君には身に覚えのないことでした。けれどもそういうわさほど広がるのは速く、心ないクラスメートたちの陰口は、山崎君の気持ちを重くしていきました。以前なら、悩みを打ち明ければ力になってくれた安田君も、自分のほうから遠ざけてしまったかと思うと、ますますつらくなるのでした。

先生 では、これで終わる。

生徒 「起立」「礼」

先生 山崎、ちょっと。

男子A (小声で)ほら、あのことだよ。

女子C (小声で)いくら成績良くて、ここまでうわさが広まったら、先生も黙ってらんないわよねえ。

先生 山崎、実はおかしなうわさを聞いたんだが…。

山崎 先生、僕は…。

先生 ああ、分かっているよ。君のことだからそんなはずはないと思ってはいたが、わたしも心の中では気にかかっていたんだ。ところが昨日、安田が話しに来てくれてね。山崎のことは昔から知っているが、絶対そんなことをするやつじゃないってね。

山崎 (驚いて)安田が…？

先生 幼なじみだそうじゃないか。近ごろよそよそしいって心配していたぞ。君たちはいいライバルだな。

ナレーション その時、山崎君は心に仕えていた重いものが、スッと取れた思いがしました。そして心の中でこう言ったのでした。

山崎(モノローグ) 安田、ありがとう。勘弁な！

<完>